朝鮮の方々のこと

松下いし

私は、現在（平成四年六月）七十三歳です。終戦当時、北朝鮮（朝鮮民主主義人民共和国）や韓国の方々にお世話になったことを皆さんに知って頂きたく書きました。

◇

昭和二十年八月、今年は、亡き姉の十七周忌だなと思いながら、いつものように近道をして病院に向かっていた時のことです。私は、左肺（結核）を患い、毎日、元山の病院に通院していました。

すると、向こうから主人と同じ会社に努める谷川さんが足早にこられ「どこへ行かれますか」と尋ねられるので「病院へ」と私は答えました。

谷川さんは「今日は、行っても診てくれないから、早く自宅に帰りなさい」と言われました。

訳も分からないまま帰宅しました。そこには、社宅の人たちが皆で集まって泣いていましたので、「何かあったのですか」と私は聞きました。

「日本が戦争に負けたのですよ」と社宅の人たちの答えが返ってきました。

私はラジオを聴いていなかったので、訳の分からぬまま谷川さんの話を聞いていましたが、その時、やっと理解することができました。

社宅の皆さんは、全員が涙を流しておられましたが、病気を患っていて、そんなに長生きもできないと、当時思っていた私は泣けませんでした。

夜、主人が帰宅して「今晩、零時に最後の送還列車を出すから、子どもたちを連れて京城まで逃げなさい」と言いましたが、私が「死ぬ時は家族全員が一緒にしましょう」と言って残ることにしました。

結局、会社の役員の七家族だけが残ることにし、社員とその家族は全員引き揚げました。これが、最後の別れとなりました。

二日後に残留した人が全員で集まり話し合いました。そこへたくさんのソ連兵士がやって来ました。ほとんどは四人兵らしく丸坊主頭で、四